新南陽市史

好みによって、上人および伴僧へ
中椀　酒煮とうふ（豆腐）、枝さんしょう（山椒）
生菓子　おほろまんじゅう、しいたけ、やうし
薄茶

好みによって、相伴僧、膳役へ
合　酢のり、しょうが
肴　酒とうふ（豆腐）、粉こしょう（胡椒）

なお、上人の行列の主なものは次のとおりであった。

先乗
長浜五郎左衛門――神輿――御朱印箱――御免笠――立傘――台傘――上人駕籠――薄縁――日傘――挾箱――乗掛駕
籠――茶弁当――両掛挾箱――合羽箱――御宝物扨子――上人膳具――長持――駕籠
六棹――池田左内

象の通行　山陽道が五街道に準ずる主要街道であったこと、殊に中国・オランダ国との交易の窓口であった長崎と江戸を結ぶルートであったこともあって、外国からの賓客の通行、それに関連した唐馬や象など将軍への献上品である珍しい物品も、しばしば通過した。それらの珍品中、当時の沿道住民たちを最も驚嘆させた動物として、小山のような巨体と一見グロテスクとも思える長い鼻を備えた「象」があった。

享保十四年（一七二九）三月、

将軍への献上品として、「象」なる動物が長崎から江戸へ向かう途中徳山領内を通過する

と、幕府からの通知を受けて、少なからずとまどった。すなわち「象」の領内通過については前例が無く、それがどのような物か、体の大きさは、食物は、仮宿所は、などなど皆目見当がつかない状態であった。そのまま放置しておいて、象の通過の際に不手際が起これば、幕府から藩への責任追求は必至である。そこで徳山藩は三月二十一日、象の通過中の接待仕様について事前調査を行うため、藩士の福山彦七を下関へ派遣した。以下『御蔵本日記』によって、象通過までの藩側の対応を見ると次のとおりであった。

三月二十五日　幕府の先触れによると、象は富田村に一宿する予定になっていて、藩側では宿所を用意していたところ、象の歩行が殊の外速く、同二十九日には徳山宿泊の予定であると、象世話役高木作右衛門手代からの連絡が入った。そこで、藩では徳山町御客屋側に仮小屋の建設を開始した。

三月二十六日　下関へ派遣されていた福山彦七は、下関から小倉に渡り、象の宿所、飼料などの手配について、つぶさに見分して今夜帰徳した。そして、直ちに藩府へ報告した。

三月二十八日　徳山領内富海町での象小屋の建設を通知され、藩では直ちにその建設に着手した。

三月二十九日　象の徳山町宿泊が四月一日と決まり、藩では領内象世話役々人渡辺弥六・勝屋甚右衛門二名を任命し、本藩領境の富海町へ派遣することを決定する。

三月晦日　象の吉田（現下関市吉田）宿泊状況を委細に見届けた福山彦七が今朝帰徳し、当職粟屋内蔵へ報告する。また、象世話役々人渡辺らを富海町へ派遣する。

象の徳山到着はいよいよ明日に迫ったため、宿所となる御客屋警備役として表門辻固め役三名、同裏門、小門口同四名、合計七名の足軽を任命し、火用心役としては黒河藤七およびその手子役四名を任命した。なお、象の